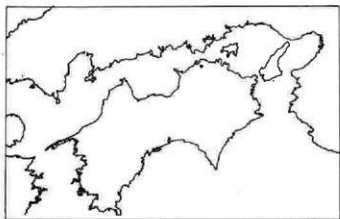


醍醐3号墳発掘調査報告

1986年3月

香川県教育委員会

醜醐3号墳発掘調査報告



1986年3月

香川県教育委員会

例 言

1. 本書は坂出市西庄町醍醐1512-1において香川県教育委員会が実施した醍醐3号墳の発掘調査概報である。
2. この調査は、昭和60年度に香川県教育委員会が国庫補助事業として実施した遺跡確認調査である。
3. 調査実施及び古墳の保存については、醍醐3号墳の土地所有者である木澤 豊氏のご理解とご協力を賜った。記して謝意を表したい。
4. 坂出市西庄町醍醐の川崎 実氏の御好意により、氏が所蔵する醍醐3号墳周辺出土遺物を実測・掲載させていただいた。
5. 調査は坂出市教育委員会の協力をうけて、香川県教育委員会職員斎藤賢一、廣瀬常雄、中西 昇が担当した。
6. 本書の遺構実測図中に記入したレベルの単位はメートルである。
7. 挿図の一部に国土地理院発行の五万分の一地形図「丸亀」を使用した。
8. 本文の執筆は文末に文責を記し、編集は廣瀬常雄が担当した。

地図は国土地理院地形図を使用しました。

目 次

I. はじめに	1
調査の契機と経過	1
II. 墳 丘	5
III. 埋葬施設	9
IV. 遺 物	11
1. 出土状況	11
2. 須恵器	11
3. 周辺出土土器	12
V. ま と め	14

図 版 目 次

図版 1	航空写真	図版 6	羨道部（南より）
図版 2	墳丘遠景（西より）		羨道部（北より）
	墳丘近景（南より）	図版 7	羨道東側壁
図版 3	墳丘及び羨道・外護列石		羨道東側外護列石
	玄室奥壁	図版 8	羨道西側壁と外護列石
図版 4	玄室奥・東側壁		羨道西側外護列石
	玄室奥・西側壁	図版 9	甕罎 3号墳出土遺物
図版 5	玄室東側壁		甕罎 3号墳出土遺物
	玄室西側壁	図版 10	周辺出土遺物

挿 図 目 次

第 1 図	甕罎 1号墳石室	1
第 2 図	甕罎 2号墳	1
第 3 図	城山遠景	1
第 4 図	新宮古墳石室	2
第 5 図	綾織塚古墳石室	2
第 6 図	甕罎古墳群分布図	2
第 7 図	周辺の古墳	3
第 8 図	調査トレンチ配置図	5
第 9 図	第 1、2トレンチ（東より）	5
第 10 図	第 2トレンチ北壁七層実測図	6
第 11 図	羨道部南北主軸土層実測図	6
第 12 図	甕罎 3号墳々丘測量図	7～8
第 13 図	甕罎 3号墳出土須恵器実測図	11
第 14 図	周辺出土須恵器実測図（1）	13
第 15 図	周辺出土須恵器実測図（2）	14

I.はじめに

1. 調査の契機と経過

香川県坂出市西庄町醍醐の城山山麓の傾斜地には約10基の古墳が分布しており、醍醐古墳群と呼ばれていた。各々の古墳の本格的な調査は実施されていないが、中にはいわゆる巨石墳も見られ、石室規模の大きさから天皇陵級の古墳の横穴式石室と比較されることもあった。

当該地は傾斜地であるが、海拔50m程度の位置であるために、ミカン畑などに開墾されている。醍醐3号墳は、すでに横穴式石室を南に開口していたが、直近まで畑地がせまり、また墳丘の北側は溜め池の築堤になっていた。香川県教育委員会では、3号墳の石室規模の大きさや、醍醐古墳群が群集墳として比較的良好なかたちで遺存することなどから、資料を整備する方針をきめ、3号墳の調査を実施した。

調査は昭和61年2月1日から着手し、玄室規模の把握を目的としたが、玄室の調査には北側の溜め池からの漏水等の事態が生じたため、茨道部の発掘調査等に変更し、3月31日までおこなった。

発掘調査の経過（調査日誌よりの抜粋）

- 2月3日 発掘調査初日。発掘道具搬入。
- 2月4日 伐開作業。
- 2月5日 伐開作業。
- 2月6日 伐開作業。
- 2月7日 伐開作業。
- 2月10日 伐開作業。
- 2月12日 杭打ち。伐開作業。
- 2月13日 地形測量。
- 2月17日 地形測量。



第1図 醍醐1号墳石室



第2図 醍醐2号墳



第3図 城山遠景

- 2月19日 伐開後の写真撮影。主軸線の設定。墳丘西側に第1トレンチを設定後掘り下げ開始。西庄町醍醐の川崎 実氏が自宅宅地より出土した須恵器持参。
- 2月20日 平板による墳丘周辺の測量開始。
- 2月24日 羨道部の主軸線より東側部分の掘り下げ開始。前室袖石を検出。
- 2月25日 羨道部の主軸線より西側部分の掘り下げ開始。羨道部西側側壁を確認。袖石は認められず。
- 2月26日 羨道部の掘り下げ継続。新しい割れ口を持つ板状の角礫多数を新しい炭・木片とともに検出。
- 2月27日 墳丘西側の第1トレンチの掘り下げ継続。
- 2月28日 墳丘西側に第2トレンチを設定し掘り下げ開始。
- 3月3日 墳丘第2トレンチの掘り下げ継続。羨道西側に発掘区を拡張し外護列石を確認。
- 3月4日 羨道部の東側に発掘区を拡張し掘り下げ開始。
- 3月5日 羨道部東側拡張区で石列を検出。羨道部横断面土層実測。
- 3月6日 羨道部及び東側拡張区の掘り下げ継続。
- 3月7日 羨道部及び東側拡張区の掘り下げ継続。
- 3月10日 羨道部の掘り下げ継続。羨門より南約2mで落ち込みを確認。須恵器片出土。
- 3月12日 羨道部西の畦を土層実測後取り除き外護列石の石組みを検出。
- 3月13日 羨道部精査。挙人の礫を多く含む暗黒灰褐色粘土層からその上面の砂層にか



第4図 新宮古墳石室



第5図 綾織塚古墳石室



第6図 醍醐古墳群分布図



番号	遺跡名称
33	堀船古墳群
32	王塚古墳
31	城山跡古墳
30	西原寺古墳群
29	弘法寺1号墳
28	山ノ神古墳群
27	堀ノ池古墳群
26	城ノ口古墳群
25	城山跡遺石
24	大明神原古墳
23	明神原跡出土地
22	北山古墳群
21	福ノ庄古墳群
20	別宮古墳群
19	真伏古墳
18	ハカリノロ古墳
17	金谷古墳
16	藤山古墳
15	藤山古墳
14	別宮古墳群
13	地蔵谷古墳
12	歌交神社古墳群
11	藤土宮古墳群
10	白砂古墳
9	山神古墳
8	西山古墳
7	グイバイ古墳
6	グイバイ古墳
5	グイバイ古墳
4	グイバイ古墳
3	グイバイ古墳
2	グイバイ古墳
1	堀船古墳群

第7図 周辺の古墳

けて径60cm前後の礫を検出。羨道部側壁の石を抜き取った際に落とし込んだものと確認し除去。

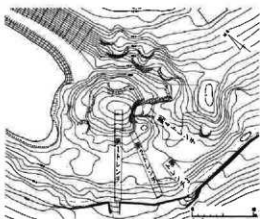
- 3月17日 羨道部精査。暗黒褐色粘土層を取り除く。墳丘西に第3トレンチを設定し掘り下げ開始。
- 3月18日 墳丘西第1・第2トレンチの精査。
- 3月20日 羨道部東側壁の土層実測、写真撮影後除去。東拡張区掘り下げ。
- 3月21日 羨道部東側拡張区掘り下げ。円形に巡る外護列石を検出。
- 3月22日 羨道部東側拡張区精査。外護列石内側に散乱状態の礫群検出。
- 3月24日 清掃後全体写真の撮影。玄室・羨道部の写真測量について打ち合せをおこなう。
- 3月25日 墳丘西第3トレンチ拡張。暗黒褐色粘土層を検出。羨道部写真測量を開始。
- 3月26日 第1・第2・第3トレンチ上層実測。
- 3月27日 玄室・羨道部床面プランの実測。
- 3月29日 埋め戻し開始。
- 3月31日 埋め戻し完了。現場での調査終了。

(廣瀬)

II. 墳 丘

本墳は、墳丘に繁茂した松樹等の巨木を採取した際の深掘りの残穴が各所に認められ、また北側を池とその土手によって墳丘の原形を損ねているが、径20m、高さ5mを測る円墳と推定されていた。本墳は、尾根の稜線から北に外れた斜面に立地しているため、山側では上砂の堆積が著しく、現状では比高差2mを測るにすぎない。しかし、墳丘西側に設けたトレンチの土層により、山側において本来は少なくとも3.5mの比高差を持っていたと思われる。一方、東側は墳頂からの比高差5mまではほぼ同一の傾斜を示し、その後は平坦となって池に続いている。墳頂からの距離による西側との比較から、この変換点が墳壙と思われる。このことから、本墳の規模は径20m、高さ3.5～5mが推定できる。しかし、墳丘測量図の47～49mにかけての等高線は直線状を呈する状況でもあり、一辺20mの方墳の可能性も考えられる。

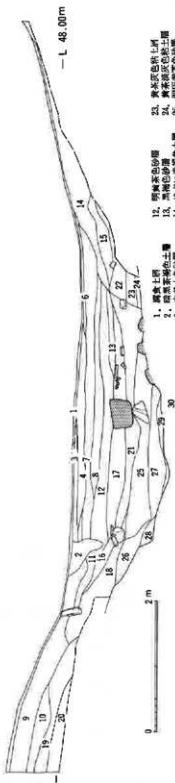
従来、本墳は周溝を伴うものと考えられていた。今回の調査では、これを確認するため墳丘西側に3本のトレンチを設定して(第8図)調査を行ったが、周溝と断定できる遺構の検出はできなかった。しかし、第2トレンチの土層序(第10図)からも明らかなように、少なくとも墳丘の西にあたる山側斜面には地山面での落込みがみられる。この周溝状の落込みは、墳丘築造の際の盛土を得るためと、墳壙の境を明確に区別する目的で土取りが行われた結果と考えられる。この落込みの最下層に堆積している青灰色砂層と直上の暗黒褐色粘土層は、川底の状況に類似するが、暗黒褐色粘土層は羨道部の床面にまで広がりを示す。さらに、暗黒褐色粘土層上面には土砂の流入によって形成されたとおもわれる砂層が墳丘の山側斜面にも広く分布している。この砂層の堆積は、砂層下半から出土したガラス製品により、明治から大正時代にかけて大規模な開墾がおこなわれた時点以降の比較的新しい時期のものと考えられる。いずれにせよ、この暗黒褐色粘土層の堆積は、トレンチを設定した墳丘西側から羨道部及びその前面にかけてみられることから、山側斜面には墳丘築造の結果として生じた周溝状の落込みが、古墳



第8図 調査トレンチ配置図

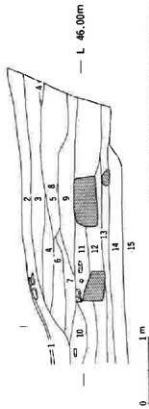


第9図 第1・2トレンチ(東より)



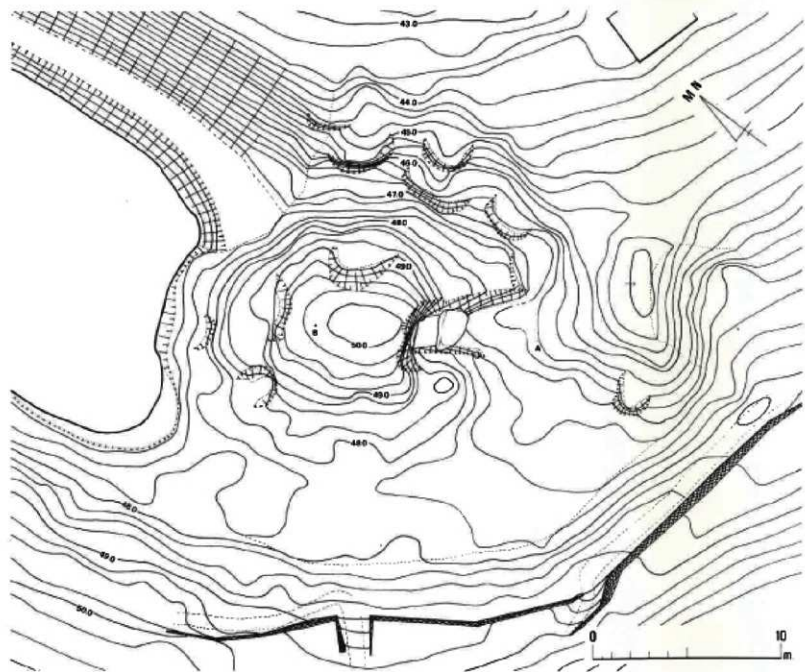
第10図 第2トレンチ北軸土層実測図

1. 腐食土層
2. 暗褐色粘土層
3. 白濁土色砂層
4. 赤土色砂層 (E)
5. 赤土色砂層 (E)
6. 暗赤土色砂層
7. 暗赤土色砂層
8. 暗赤土色砂層
9. 暗赤土色砂層
10. 暗赤土色砂層
11. 暗赤土色砂層
12. 暗赤土色砂層
13. 暗赤土色砂層
14. 暗赤土色砂層
15. 暗赤土色砂層
16. 暗赤土色砂層
17. 暗赤土色砂層
18. 暗赤土色砂層
19. 暗赤土色砂層
20. 暗赤土色砂層
21. 暗赤土色砂層
22. 暗赤土色砂層
23. 暗赤土色砂層
24. 暗赤土色砂層
25. 暗赤土色砂層
26. 暗赤土色砂層
27. 暗赤土色砂層
28. 暗赤土色砂層
29. 暗赤土色砂層
30. 暗赤土色砂層



第11図 第2トレンチ南軸土層実測図

1. 腐食土層
2. 暗褐色粘土層
3. 暗褐色粘土層
4. 暗褐色粘土層 (黄白色砂層を含む)
5. 暗褐色粘土層 (暗赤土色砂層)
6. 暗褐色粘土層
7. 暗褐色粘土層
8. 暗褐色粘土層
9. 暗褐色粘土層
10. 暗褐色粘土層
11. 暗褐色粘土層 (暗赤土色砂層を含む)
12. 暗褐色粘土層
13. 暗褐色粘土層
14. 暗褐色粘土層
15. 暗褐色粘土層



第126回 図面3号墳々丘測量図

築造当時よりめぐっていたと考えられる。

墳丘を構成する盛土は、やや赤みがかった粘質土と砂質土の混合した中に黄色味がかった小円礫ないし人頭火の円礫を多く含んでおり、墳丘より山側の地山を削り取った土と思われる。墳丘盛土の土層はそれほど明確に細別できるものではないので、版築様の叩きしめが行われたとは考え難い。しかし、羨道部の側壁背後で検出した版築は、厚さが約10~20cmで、小礫をかなり含んだ土を用いている。なお盛土と石室背後の版築の関係については、今回の調査では確認するに至らなかった。

(斉藤)

III. 埋葬施設

本墳の石室は、玄門部から南の天井石が全て取り除かれて調査前から開口し、玄門部のすぐ南に前室部の天井石と思われる扁平な巨石が転落した状態で露呈していた。このため、羨道部の状態は不明で、今回の調査までは玄室部分のみの法量が報告され、両袖型の横穴式石室と考えられていた。

今回の調査は、石室全長及び形態を明確にする目的で、転落した天井石の南側部分を発掘調査するとともに、石室の実測をおこなった。その結果、本墳は、南北主軸が33°40'西偏する全長約13.8mの複室構造の横穴式石室であることが明らかとなった。

玄室長は約6m、玄室幅は奥壁部で約2.3m、玄門部で約2.8mを測り、奥壁付近に比して玄門付近が約0.5mほど広がりを見せている。床面には、おそらく開口した部分からの転石と考えられるものも含め、人頭火から拳人の礫が散乱している。玄室奥壁部は、現床面で幅約2.25m、高さ約2.6mを測るが、下端には比較的扁平な幅約2.2m、高さ約1.8mの巨石を据え、さらに、小さな石を積み重ねて補充している。巨石の上にはさらに平たい石を3枚横に重ね内傾気味に積み上げている。奥壁部分における本来の床面は、羨道部の床面から考えて現床面より少なくとも約0.5mは下がったところに位置すると思われ、奥壁の規模はさらに大きくなるものと考えられる。玄室側壁は、東西ともにほぼ高さの揃った巨石を3石ずつ下端で用い、その上は比較的小さめの平たい石を横積みにし、間を小礫で埋めている。西側壁の方はL=47.0mとL=48.0m付近で高さを揃えており、玄室全長を3石でほぼカバーしているが、もう一方の東側壁にはこの規則性がみられない。玄室の天井部は3枚の巨石を架構して天井石としている。玄室はその中心がほぼ墳丘の中央となる場所に位置している。玄門は、東西ともに巨石を立柱状に立てた上に比較的小さな石を小口積みにし、さらに天井石を榴石状に玄室天井石より一段低くし架構している。玄門立柱はともに玄室側壁より約0.55m突出しており、現状では西側が幅約0.8m、高さ約1.45m、東側が幅約0.95m、高さ約1.4mを測る。

前室部分は中央に天井石が落ち込んでおり、今回は発掘調査をおこなわなかった。露呈している部分においては側壁がかなり抜き取られ、下半の石を残すのみであるが、僅かに東側玄門に接した部分で残存状態が良好である。前室の側壁は、東側においては玄室側壁の延長線上にあわせて玄門

より後退しているが、西側では玄門から後退することなく羨道端まで直線的に続いている。前室は東側に板状の巨石を立柱状に立てて袖とする片袖で、前室長約4.7m、幅は、玄門部で約2m、前門部で約2.1mを測る。玄室同様、羨道部に向かうに従ってやや広がりを見せる。前室はほぼ中央で天井石が落下しており、両側壁の全容は不明であるが、ほぼ直線的に延びているものと思われる。床面も未掘であるので不明である。前室西南隅で検出した板石は、露出部分に限ると幅約1m、厚さ約15cmを測り、一見閉塞に用いられた扉石のようである。しかし、板石上面に堆積する角礫層は側壁の石材を抜き取った際に破砕した石の残片と考えられ、この角礫層に接する板石も同時期の可能性がある。そして、板石の下には新しい時期の堆積を示す砂層が入り込んでいることや、角礫層の間からは炭及び燃焼途中の木片が検出されるなど、石室破壊の時期はさほど古くない事をもがっている。しかし、前室の全容が不明の今この板石の性格を明確にすることはできない。

羨道部は、第11区羨道部南北主軸土層実測図でも明らかのように、埋土の大部分には明治以降のある時期に行われた開墾に伴う石室石材の抜取りに起因すると思われる破砕残片が多数含まれており、短期間のうちに埋もれたと思われる。羨道部の全長は約3.1m、幅は前門部で約2m、羨門部付近の最大幅約2.3mを測る。羨道も玄室・前室と同様に外側に向かって幅の広がりをみせる。羨道部の側壁は何れも最下段を残すのみで、本来の高さは不明である。羨道部東側壁の前室に続く石は、扁平な板状の石を横に立てて用い、その背後を粘土で固める手法で、他の部分が巨石を安定した状態で据え置くと対照的である。前門部から羨道部にかけて、西側壁はやや西に彎曲する傾向を示している。羨道部床面には敷石・排水溝などの施設は検出されなかった。

外護列石は羨道端につづく位置で検出した。西側で検出した外護列石は羨道部西側壁からほぼ直角に折れて西へ直線的に約3m延びている。羨道端にもたせかけた板状の石から始まり、西に向かうにしたがって上昇する地山に対応させるためか、比較的小きな石を用いて積み上げ、西端と最上部に巨石を各一石置いてまとめている。一方、東側では緩やかに弧を描く石列約4mを羨道部東側壁に続く位置で検出した。比較的安定した状態で検出されたことや、その内側に検出した石垣状の石組との関連から、本来の状態を保っていると考えられる。石列は発掘区東端より更に伸びる状況が推察される。石垣状の石組に用いられている石材は、扁平なものが多く、その段数は5～6段で、石と石の間には粘土を詰めている。この石組は、その基部に版築様の圓い粘土を伴っており、墳丘の築成に伴うものと思われる。その位置は、西側外護列石とする見方も可能である。とすれば、羨門から東西両側にほぼ直線的に延びる外護列石となり、本墳の形態は方墳の可能性がたつくなる。東側における外護列石とみられる石組と、その外側に位置する弧を描く石列との間からは人頭大の円礫を検出したが規則性はみられず、散乱した状態であった。

前室及び羨道の側壁背後には版築様の粘土層を検出したが、大小多数の礫やブロック状の黒褐色粘土を含んでおり、その識別は困難をきわめた。石室掘り方は検出されなかった。地山面に基底石を置いた後順次石の背後を粘土で固めながら構築したことが推定される。ただ、床面において基底石の周囲に幅5cm前後の落込みの検出できる部分があったが、石が自重により沈下した結果できた

ものか、基底石の据え穴かは判断できなかった。

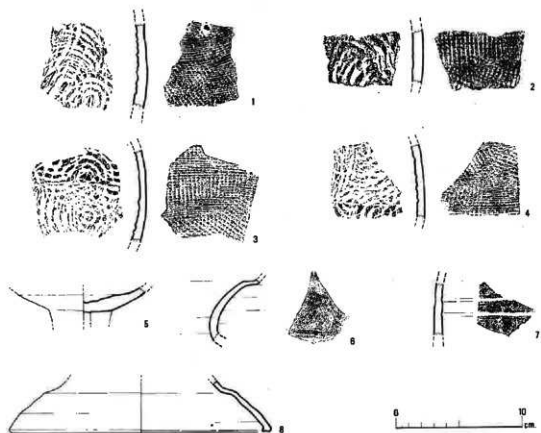
石室構築に用いられている石材は、今日も古墳周辺に散在する安山岩である。石室の構築は、地山面に基底石を並べてプランを設定した後、側壁を積み上げていく方法が推定されるが、玄室と前室の基底石の上面レベルがほぼ同一であり、基底石の高さには意識的な調整が認められる。

(斉藤)

IV. 遺物

1. 出土状況

遺物は、攪乱を示す砂層などからも少量出土したが、多くは暗黒褐色粘土層から出土した。全て須恵器片で完形のものは出土していない。器種は、坏・高坏・壺・甕・脚付き長頸壺である。いずれも小片で、集中する傾向もなく、かなり攪乱を受けているものと思われる。但し、暗黒褐色



第13図 醍醐3号墳出土須恵器実測図

粘土層は砂層に比べるとその分布範囲も狭く、この古墳周辺に限定されることから、上方からの流れ込みによる二次堆積の可能性は少ないと考えられる。

2. 須恵器 (第13図)

1～4は壺の体部破片である。外面には格子状の叩き目を施したあと、刷毛目調整を施している。内面には青海波紋がみられるが、稜のハッキリしたものとそうでないものがある。この他にも数点の破片が出土しているが、同一個体のものは見られない。

5は高坏である。墳丘西第1トレンチの墳裾の挙大前後の円礫が集中する石組みの上面より出土した。脚及び坏部上半を欠失しているが、二方向からの透かし孔がある。一度目の切り込みは鋭く貫通しているが、切り取りのための二度、三度目の切込みは、それぞれ別の方向からおこなわれている。

6は壺の頸部と思われる。やや短く太い頸部である。大きく外反しながら立ちあがったのち、ほぼ水平となり、再び直線的に立ち上がって口縁へ至ると思われる。

7は長頸壺の頸部である。径は3.8cm前後と考えられる。幅4～5mmを測る二条の凹線がめぐり、内外面ともに回転による丁寧なナデ仕上げが施されている。

8は長頸壺の脚部と考えられる。脚端部径の約4分の1の破片で、径21.0cmを測る。端部は内と外に肥厚して丸みを帯びる。やや内彎気味に立ち上がり、段を経た後外反しながら立ち上がる。

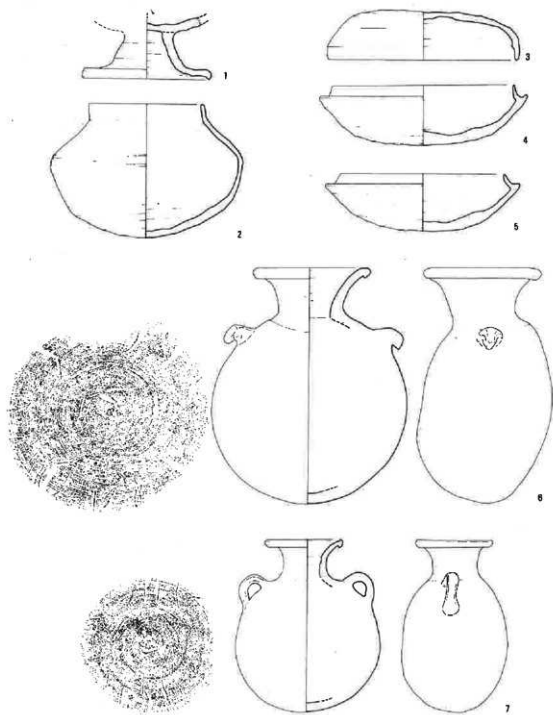
3. 周辺出土土器 (第14、15図)

第14図の1～7は、醍醐3号墳の発掘調査期間中に西庄町醍醐の川崎 実氏が、昭和30年代に自宅の水田畦から出土したものとして持参された須恵器である。氏の宅地は醍醐3号墳の北約300m(第6図A地点)にあって、城山から東に派生した尾根が微高地となって終了する境界の標高約20mの位置にある。遺物は、宅地を拡張するために微高地である水田の畦を削り取った際に、水田地表面より約1.5m下からまとまって出土したが、礫や他の遺物は伴出しなかったとのことである。

1は短脚の高坏で、透かし孔を持たない。脚端部は下方に短く屈曲させているが、外面は丸く仕上げ、稜を持たない。脚部は内外面ともに回転させながら上方へナデ仕上げを施している。坏部は上半を欠くため形態は不明である。脚部最大径は10.2cmを測る。

2は短頸壺である。やや内傾する口頸部からいよいよ変曲点を経て緩やかな角度で直線的に下部に至る。胴部との境に幅1mm程の沈線を描いているが粗雑で、始点と終点が一致せず約3分の2周ほどズレて描かれている。体部下半から底部にかけての外面にヘラ削り調整が施されているほかは、回転によるナデ調整が行われている。器壁は比較的薄手である。口径8.9cm、胴部最大径15.2cm、器高10.7cmを測る。

3は坏蓋で、口径14.7cm、器高3.9cmを測る。体部は短く直立気味に立ち上がる。天井部との境は不明瞭である。天井部は偏平で薄い。焼成は普通。体部の4分の1を欠失している。



第14图 周边出土须惠器实测图 (1)



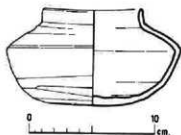
4・5は坏身である。4は口径12.8cm、器高4.6cm、立ち上がり部0.8cmを測る。やや外反気味に内傾した立ち上がりと、それに続く退化した受け部をもつ。底部外面にヘラ削り調整が施されているが、他は全て回転によるナデ調整が施されている。

5は薄く直立する立ち上り部としっかりとした受け部をもつ。体部は比較的薄い底部はしっかりしている。底部外面はヘラ削り調整が施されている。口径14.4cm、器高4.7cm、立ち上り部0.9cmを測る。

6・7は提瓶である。6はやや大型で、器高18.7cm、口径8.7cm、胴部最大径15.5cm、胴部最大厚10.3cmをはかる。口頸部は外彎気味に立ち上がり、口縁部端で下方に折り曲げている。体部の片方はやや削り気味のカキ目調整を施すが、他方はナデによる調整を施している。口頸部と体部はやや歪んで整合しない。また、口縁部にも少し歪みがみられる。把手は退化し、カギ状の突起を呈する。7はやや小型で、器高13.7cm、口径5.8cm、体部最大幅11.5cm、体部厚さ8.4cmを測る。頸部は外彎気味に立ち上がって口縁部に至る。口縁部は上下両方向につまみ上げたように稜をもつ。口縁部から体部にかけて暗緑色の自然釉がみられる。体部の一面に回転ヘラ削り調整が施されているが、他の部分は回転ナデによる調整が施されている。焼成は堅緻である。

第15図は、醍醐3号墳の上方に敷設された農道の拡幅・舗装工事の際に出土した短頸壺である(第6図B地点)。他に遺物が伴出していないが、巨石があったということなので、古墳が所在した可能性も考えられる。口頸部に歪みをもつ。焼成は良好で、よい灰色を呈す。底部には二度にわたるヘラ削り調整を施している。口径7.6cm、器高7.8cmを測る。

(斉藤)



第15図 周辺出土須恵器実測図 (2)

V. ま と め

今回の調査は、墳丘及び石室の形態と規模を明確にすることを目的としておこなった。墳丘の形態及び規模を把握するために墳丘測量を行うと同時に、墳丘西側に3ヶ所のトレンチを設定して調査をおこなった。また、石室の形態と規模を把握するため、玄室の測量をおこなうとともに羨道部分の発掘調査をおこなった。

今回の調査により、次の点が明らかとなった。

- ① 従来、本墳の西側及び南側にある幅5mの平坦地は周溝の跡であろうと考えられていた。今回の調査では、この点を明確にするため、墳丘の西側に3ヶ所のトレンチを設定した。このトレンチの調査により、少なくとも墳丘の西側には、墳丘の築造に伴ったと考えられる周溝状の落込み

が確認された。しかし、埋土は比較的新しいものであり、この落込みを周溝と断定し得る条件の検出は出来なかった。

- ② 墳丘の形態は、当初円墳と想定されていたが、墳丘の地形測量図と外護列石の検出状況から、一辺が約20mの方墳の可能性が強くなった。墳丘は、数層以上に分類しうる土層をもって築成されている。墳丘の比高差は西側で約3.5m、東側で約5mを測る。
- ③ 羨道部分の発掘調査により、石室は全長約13.8mを測る複室構造の横穴式石室であることが明らかとなった。全長は、県内に所在する巨石墳の中で最大の規模である。また、複室構造をもつ古墳は県内で数例が知られているが、坂出地域（旧阿野郡）で比定されている新宮古墳・綾織塚古墳はその全容が明らかでなく、当地域においては本墳が初例となる。
- ④ 石室に用いられている石材は、本古墳の周辺に産する安山岩で、偏平な自然面をうまく用いている。中でも、前室の袖石とそれに続く羨道側壁に用いられている板石及び西側外護列石の最初の板石は、とりわけ石の偏平な面を巧みに用いており、その用法に於て他の石材とは性格を異にしており注目される。
- ⑤ 羨道の両サイドに直線的に延びる状態で検出した外護列石は、今回行った墳丘の地形測量図による成果とともに、本墳の墳丘形態を、従来考えられていた円墳から方墳へとかえさせるに足るものと思われる。
- ⑥ 築造年代については、今回の発掘調査により出土した遺物の量・器種共に少なく、遺物から判断することは困難を伴うが、石室構造や周辺の古墳出土遺物から、6世紀後半の年代を与えることができるであろう。

（斉藤）

圖 版



航空写真



墳丘遠景 (西より)



墳丘近景 (南より)



(上) 墳丘及び羨道・外圍列石
(下) 玄室奥壁



玄室奥・東側壁



玄室奥・西側壁



玄室東側壁



玄室西側壁



羨道部 (南より)



羨道部 (北より)



茨道東側壁



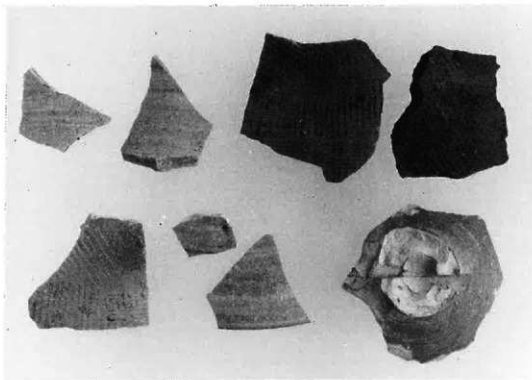
茨道東側外圍列石



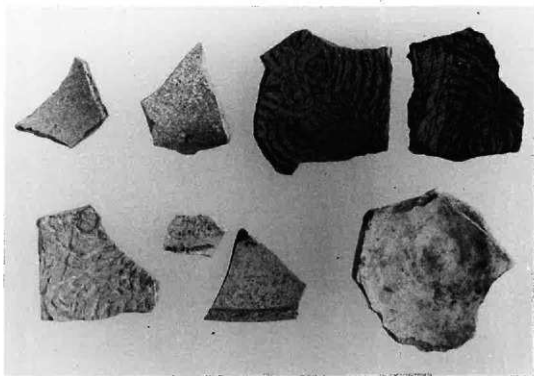
羨道西側壁と外護列石



羨道西側外護列石



醍醐 3 号墳出土遺物



醍醐 3 号墳出土遺物



醍醐3号墳発掘調査報告

編集・発行 香川県教育委員会

印刷 成光社

発行日 1986年3月31日